

出題意図 政策小論文 令和 8 年

漁業・水産業において生じている諸課題について多角的に把握し、論理的な思考と実践的な解決方法を的確に論述できるかを審査し、海洋政策文化学科における学習の適性を判断する。

## 問1 解答例

### ① 例1

文章 A では、単なる真似ではうまくいかないことも多く、「地元ならではの」体験ができる「コト消費」を企画するにしても地元の人にとっては当たり前すぎて意外と見つからないものであることから、地元以外の様々な人の話を聞いてみることや、「地元ならではの」コンテンツをどのように生み出してどのように運用しているかを知ることの重要性が述べられている。文章 B では、エコツアーは自然環境に深刻な負荷を与える可能性があるため、参加するツアーリストの自覚や責任が必要で、ガイドの質の向上を図っていく必要もあること、また、エコツアーの実施には、観光資源の発掘や商品開発、ツアーの企画や手配、観光客の募集などを行う旅行業法の資格やノウハウが必要であるものの、地域には専門家がないことが多いことから、安易に自然環境などの「部品」だけを地域外の旅行者に提供することで、利益の大部分が地域外へ漏出する危険性について述べられている。文章 C では、海業について、「だれが、何を利用して、何をするか」を明確にすることが重要ななかで、「だれが」の部分がはっきりしないまま単なる「海のビジネス」としてすすめられることで、漁業者や地域住民が周縁化、すなわち置き去りにされる懸念について述べられている。(527 字)

### ② 例2

観光を活用して地域を活性化する際に留意すべき点として、文章 A は地元の魅力を発見することについて、文章 B はエコツアーが環境に与える影響について、文章 C はブルージャスティスの視点に基づく真の海業の深い理念について指摘している。まず文章 A は、漁業に陰りが見える中、海自体を地域資源として活用して地域の収益を図る海の地方創生としての海業の取り組みを例に「地元ならではの」体験を提供する海女小屋体験のようなコト消費により観光客を呼び込むことが成功の鍵であると述べる。また文章 B は、沖縄のサンゴ礁のような手つかずの自然が観光資源であるが、自然環境の魅力をツアーリストに伝えるエコツアーやそのガイドの役割に着目する。エコツアーは、自然環境への影響がないのではなく、ガイドや旅行者の知識と、観光資源についての地域の関与が必要であり、地域が自然環境を観光資源の部品として提供するだけでは地域に利益が還元されない点を指摘する。さらに文章 C は、海業を、海や文化等の多様な地域資源を活用する、漁業者を中心とした地域の人々の活動と捉え、誰がという主体の視点を欠いてはならず、漁業者不在の開発に注意を喚起する。そして、水面上と水面下の生命を守るという深い理念に基づく真の海業は、漁業者置き去りのテーマパーク化でなく、海洋の持続可能な利用と適切な漁業を実現するブルージャスティスの視点によって進められるべきことを述べている。(597 字)

採点基準 配点 140 点

- ① 文章 A 必要な用語ごとに配点（以下同じ） 地元ならではの、体験、地方創生、地域活性化 45 点
- ② 文章 B 自然・観光資源・自然への負荷、ガイド・エコツアアの役割・質、地域の関与・利益還元（漏出）・旅行者・部品 45 点
- ③ 文章 C 海業、漁業者主体（置き去り）・地域住民中心、だれが、多様な地域資源・ビジネス・文化 45 点
- ④ 全体の理解・まとめり・流れ 予備配点 5 点

## 問 2

採点基準案 配点 160 点

プログラムの具体的内容、説明の柱書がある。積極的、説得力ある内容が説明されている。  
30 点

留意点として、挙げられている点が、  
文章 A に対応して、地元ならではの魅力の発見、  
文章 B に対応して、自然環境、利益の地域還元、ツアーガイドの資格などの点、  
文章 C に対応して、海業としての漁業者・地域の中心性、

などに触れられており、かつ

それらの留意が必要であることと、その点が、プログラム内容に反映されていること、そのような内容であるべき理由が述べられていることから、

A~C に各 30 点配点。15 点が内容とその具体性、15 点が関連性や根拠の明確さなど。  
自然や文化が害されていないか、地元の魅力を伝えているかなど。

効果について、人を呼び込めるか、20 点、観光客によって、宿泊や購入などの経済効果があるかを 20 点。

## 問2 解答例

「漁業者と漁船で行く日の出鑑賞・釣りツアー」を企画・提案する。内容は、日の出前に港に集合し、漁船で沖に出て日の出を鑑賞した後、漁業者に教えてもらいながら釣りをするというものである。

このようなプログラムとした理由は3つある。まず、環境への負荷が小さいことである。海に入って遊ぶプログラムも魅力的であるが、サンゴの例のように多くの人が海に入ることによって環境へ負荷を与える可能性がある。そこで海に入らずにできる釣りがよいと考えた。もちろん海にごみを捨てないことなどにも注意を払う必要がある。次に、漁業者不在とならず地域外への利益の漏出も防ぐことができる。最後に、「地元ならではの」の要素である。漁業者は毎日船に乗り日の出を見ているため、おそらくその価値を感じることはないが、都会から来る一般の観光客にとっては、船に乗ること自体が非日常のとても価値のあるものである。水平線から昇る太陽を見ることができるとも普通であれば非常に稀であるが、海に囲まれ、また海に面した漁村であればそれが可能である。

以前、自分の個人的な体験としてフェリーに乗船したことがあるが、あくまで移動手段として乗っただけであるにもかかわらず、とても楽しい経験であった。その経験も踏まえ、漁村に「縁のないド素人」の視点から「漁業者と漁船で行く日の出鑑賞・釣りツアー」の企画をとおして、漁村に人を呼び込み活性化するための政策を提案する。(593)